

僕の役割は、風土豊かな阿蘇で農地の受け皿になること。

受注生産で、お客様に喜ばれるもの、欲しがられるものをつくる。

熊本県阿蘇市



●熊本県阿蘇市 内田農場 (耕作面積: 約60ha)

代表取締役社長 内田 智也 さん

[経営概要] 水稲 (11品種) 61ha、大豆10ha
[労働構成] 本人、父 (会長)、ほか従業員3名
[経営形態] 法人経営



新潟の強湿田でプラウを導入、環境に優しい有機物循環を続ける。
新潟県長岡市・有限会社成沢アグリサービス
松永和範さん、松永拓也さん

48
ページ



北海道栗山町
農事組合法人勝部農場
代表理事
勝部佳文さん
これからの勝部農場を
見据えたプラウが
やつと形になった。

特別
対談



波多野篤

スガノ農機株式会社
開発本部長
商品開発部長

数多くの
無理難題の解決プロセスは、
スガノ農機の
血となり肉となりました。

52
ページ



僕の役割は、風土豊かな阿蘇で農地の受け皿になること。
熊本県阿蘇市・有限会社内田農場
内田智也さん

74
ページ



プラウを使うのも、あるいはロータリを使うのも、突き詰めれば良い悪いではなくてそれを自分が生き方として選んだということ。

先代の深耕と乾田化が農場の礎に

内田農場は、養豚と稲作の複合経営をしていた父が、95年に作業受託を含む水稲専業として立ち上げた法人です。僕は大学卒業後に阿蘇に戻って十数年が経ちました。父から経営を引き継ぎ、阿蘇の山々を取り囲む平坦なカルデラという自然が織り成した造形のなかで営農しています。阿蘇の水田は、下層に眠っている酸性土壌を触らない浅起こしが常識とされる地域ですが、父はボトムプラウで深耕を行ない、フルクローラトラクタに、心土破碎するサブソイラ、均平・整地用のレーザーレベラーを装備して、強湿田のほ場を乾かす作業体系を確立しました。



プラウ耕で顔をのぞかせた酸性土壌

僕はそこからスタートして、無代かき栽培や乾田直播に挑戦する過程で鎮圧作業に注目したり、実践を通じて学びを得てきました。ほ場の平均区画は約30aで、地主さんの承諾を得て、合筆できる場所は14インチプラウ&レベラーで畔を取り、深く起こして整地します。台帳では約350筆ありますが、作業するほ場の枚数は140枚ほどです。作物の管理だけでなく面積を拡大できますが、草刈りや水管理なども枚数分以上に増えてしまうのが水田経営の特徴ですね。合筆して枚数を減らしていくことが作業効率とコストの抑制につながります。

水稲でも大豆でも、ほ場づくりの作業はほぼ同じ体系で行なっています。阿蘇は年間の平均降雨量が約3,000ミリと穀物生産には厳しい条件を抱えています。春作業の適期が短いので、天候条件・人員・時間に応じて耕起方法を含む作業体系をどう選ぶのか。武器となる機械をそろえて選択肢の引き出しを増やしています。

なぜ選んでいただいたのか問い続け、使い手の需要に応える生産を追求する

就職した当時の耕作面積は約20haで、請負作業が多く、米は農協出荷が中心でした。今は全作業を預かる面積が増え、約60ha規模で100%受注生産をしています。

「喜ばれるもの、欲しがられるものを作る」を前提に使い手であるお客様の要望に応えた結果水稲は11品種に。そのうちの4品種が酒米です。炊いて食べて美味しいのはもちろんのこと、僕らが作ったお米が一滴の酒になる喜びも格別です。世界を見渡すと米を炊く文化に限られているので、イタリアのパスタのように日本酒を日本の代表的な加工品として海外に売り出せたら嬉しいですね。



内田農場の米で作られた日本酒のラインナップ

米は日本国内で北から南まで広く作られていてそれぞれに魅力的な個性を持ち合わせています。そのなかで「なぜ僕らのお米を選んでいただけるのか」を意識しながら作業するように従業員にも伝えていきます。地震や豪雨で作付けが思うようにできなかった年は、供給先を紹介させていただくこともありました。20年、21年のコロナ禍では旅館やホテル、飲食店、お取引のある酒蔵などの需要が減り、厳しい局面も経験しました。それでも希少品種などは変わらず取引していただけて、人のつながりに感謝もしきれません。



震災で被害を受けた水田

深く耕せば良いというわけではない条件合った作業体系を柔軟に選ぶ

土づくりへの考え方はだいぶ変わってきました。以前は「プラウで深く耕してこそよし」、さらには、高馬力のトラクタに大きい作業機をつけて短時間で作業性を求めることに心血を注いでいました。今ここで米を作れるのは、先代がプラウ耕で土中の有機物を表に出

し、分解させて土をつくっていく作業をやってくれたおかげです。酸性土壌のまま、従来どおりの作業体系でやっていたら、米の反収は3~4俵のままでした。しかし、pH3.5の強酸性土壌は、いかに人の手を入れても作物の栽培に適しません。耕す手段のひとつとしてプラウは有意義ですが、その使い方はほ場作業条件や経営・環境に合わせて変えていくものだと思います。突き詰めれば、プラウを使うのも、スタプルカルチあるいはロータリを使うのも、良い悪いではなく農場の経営スタイル、生き方の問題になりますね(笑)。テクノロジーが進化し、膨大なデータが蓄積され、コンピュータを搭載したトラクタやコンバインが作業するようになって、実践した者には敵いません。そこが、農業の一番大事で一番ワクワクするところだと思います。手軽さを目指していろいろなデジタル機器も試しましたが、スマートを求めていくとアナログになるんです。そもそも手軽になったら、農業なんてやらなくて良くないですか？

地域の農地の受け皿になり、農産物で阿蘇の風土を伝えたい

水田は水がミネラルや有機物を運んでくれます。SDGsという言葉を使わなくても、米づくりのシステムは持続可能性を表現しているのではないのでしょうか。「なぜここで農業をしているのか」に立ち返ると、阿蘇にはすべてあることに気付かされます。土や水、風、もみ殻、稲わら、大畜産地帯の利点を活かした堆肥等々、人も資材もモノも含めて、僕らの農産物を通じて、阿蘇の風土を感じてもらいたいと思っています。ジョンディアのトラクタも作業機も買えば手に入りますが、阿蘇の風土はここだけのものです。今は米を求められているので米を作っていますし、それは阿蘇の風土にもマッチしています。でも、気候や取引が変われば、その都度必要なものを作る準備はしていかなければなりません。阿蘇の農業もこれから5年、10年で劇的に変化すると思います。農業経営者は家族や従業員やその家族だけでなく、地域をマネジメントする能力も求められるでしょう。地域の農地の受け皿になるという役割をますます果たしていかなければならなくなります。僕らが守りたいのは米でも水田でもなく、阿蘇という地域なんです。自分の経営の足元をしっかりと作ったうえで、結果として地域に貢献できれば素晴らしいですね。



未来の農業スタイルを創ること、100年先も続く農業を発信していくことを理念に掲げ、震災や豪雨災害を機に県内の青年農家と「AGRI WARRIORS KUMAMOTO」を設立